

うしたことは子どもは十分に分かっているのです。それではなぜ、連日新聞やテレビをにぎわすような悲惨な事件が起きるのか、それは一言で言うなら、子どもが親から、大人社会からきちんと尊重されていないからです。普通の家庭から異常な問題行動をする子どもが出てくると言われますが、それは違います。異常な家庭が多数派になっただけなのです。晩の10時過ぎに子どもが外をウロウロ歩いていたなら、30年前なら深夜徘徊であり、警察の補導の対象でしたが、今やそんなことは普通です。東京辺りでは、午前零時を過ぎても、お母さんがベビーカーに赤ちゃんをのせて連れ歩いている光景すら目にします。異常なものが普通になってしまった中で、道徳観を押し付けて価値観や考え方を換えさせるだけで改善できるとは思いません。子どもがきちんと寝て、食べさせてもらって、愛情を降り注いでもらっているということ、つまり子どもが過保護ではなく「自分は大事にされている」という意識を持ってない限り、問題の解決はあり得ないのです。

現場で格闘する教師の声を 教育再生会議に伝え、議論していきたい

【江澤】陰山先生は、今話題の教育再生会議のメンバーとして、まさに日本の教育の方向決定に大きくかかわっておられます。最後にご自身の抱負をお聞かせください。

【陰山】「事件は会議室じゃない、現場で起きているんだ」というドラマのセリフがありましたね。私が再生会議のメンバーとして重きを置いているのは、現場（＝学校）で格闘する人たち（＝教師）の出した結果を中央（＝国）に伝えて、その意味を日本全体で考えてもらうことだと思います。何かを議論して答えが出るのであれば、とっくの昔にその答えは出ているわけです。そうではなくて、理屈を超えた実践、あらゆる困難を超越し克服する挑戦、実践、それこそ社会構造の変化まで考えてやっていこうという、ある面では非常に大胆不敵な実践に違いないのですが、その先駆的取組みが山陽小野田で行われているわけです。そういう意味で日本の教育を動かすのは

再生会議でなく、山陽小野田市だと言っても言い過ぎではありません。山口県出身の総理の下で再生会議が開かれ、そのおひぎ元でプロジェクトが動いている、そして地元出身の河村元文部科学大臣もバックアップをしているというのも不思議な縁です。「日本の日の出は長州から」といったところでしょうか。私が以前住んでいた兵庫県の朝来では、明治維新の時に長州の志士とのかかわりがあったようですし、山陽小野田市とプロジェクトを同時進行しているのが高知県の室戸というのも運命的なものを感じます。本州の端、四国の端ということで行き来が大変ではあるのですが、がんばっていきたいと思います。

山陽小野田市の成功が日本の教育を変える

【陰山】この山陽小野田市の取組みは明らかに日本の教育を決定付ける意味があります。始まって間もないのに、はっきりとした成果があらわれ、大きな話題を提供しています。さらに現場の教師がすり減らず、むしろやる気を持っている点も大きいのではないのでしょうか。また、小さい頃からたくさんのお金をかけてものすごく難しいことをやらないと何もできないと思われていたある種の常識を覆し、むしろ元々日本に昔からあった「早寝・早起き・朝ごはん」（＝生活改善）「読み・書き・計算」（＝学力向上）と、ごく当たり前のことが人間の可能性を最大限に引き出すということを実証する決定的なプロジェクトです。成功の度合いが、来年以降の日本の教育に大きな影響を与えると位置づけています。私は大いに期待しています。（了）

